

第3回先端基礎研究シンポジウムに参加して

大阪大学大学院理学研究科 稲 田 佳 彦

先日、東海村で行われた第3回先端基礎研究シンポジウムに参加させていただける機会を得ることができました。私は大阪大学大学院理学研究科で強相関電子系の研究を行っていますが、原研先端研のウラン電子系研究グループと共同研究を行っている関係で、成果発表をさせていただきました。

先端研では研究期間を数年に設定してダイナミックに組織を運営し、活発に研究活動を行っていると聞いています。今回のシンポジウムは、その色々な研究グループがどんな研究を行っているのかを知る良い機会と思い、とても楽しみに出張しました。

初日の受付で頂いたプログラムをながめてみると、各発表のタイトルが個性的で興味をそそるように書いてあるものが多く、タイトルだけ見ても結構楽しめます。研究対象も我々に関係する強相関電子系はもちろんのこと、超伝導、生物物理、中性子星からバクテリアに至るまで、お祭りの縁日にも負けない、楽しく盛りだくさんの中身でした。プレゼンテーションも視覚的に印象的でわかりやすいものが多く、とても楽しめました。私自身の日程の都合上、2日目の早々にシンポジウムを抜けなければならず、多くの発表を見ることができなかったのが残念で、また、思いがけず我々の発表が選ばれましたポスター賞の表彰式に、失礼にもでることができずとても残念でした。

この度の先端基礎研究シンポジウムに参加してみて科学研究の発表の形態についてあらためて考えさせられました。今回のシンポジウムでは皆さん工夫を凝らしてできるだけわかりやすく発表されていて、異分野の人に平易に伝えることの重要性を強く意識していることが伝わってきます。

研究者は社会から隔離された存在ではなく、積極的

に社会に認知してもらう必要があると、最近言われています。しかし、社会に対して研究者が研究成果を伝えるとき、正確さと公平性を損なうことなくいかにわかりやすく伝えるかが重要で大きな課題です。自分の研究を真に深く理解していないと、正確さを損なうことなく平易に説明することは困難です。他の研究者の研究をしっかりと理解していないと公平性を失うことがあります。そして、それを踏まえた上で何よりも大切なのは研究者自身が研究の夢をしっかりと語ることであり、それによって熱意が伝わり、かつ自身の研究の活力につながります。

シンポジウムの発表者の方々が、できるだけわかりやすくかつ熱っぽく語られるのを見て、ダイナミックに組織運営をしている先端研の長所を感じることができました。会議初頭の挨拶で伊達センター長がキーワードについて話されていましたが、できるだけ印象深くてわかりやすい表現方法で研究成果の本質を表現する努力が先端研全体に広がっていることが伝わってきます。ポスター賞も、発表者にとっても励みになっていました。

理学、基礎科学では早急に世の役に立つ成果は出しにくいといわれています。確かに形としてすぐに結果が出ることは難しいかもしれませんが、ただ、人間は好奇心の生物であり、多くの人々の知的好奇心をくすぐる話を提供できるのであれば、それも基礎科学の大きな成果の一つではないでしょうか。

先端研のシンポジウムが知的好奇心をくすぐる場として更に大きく飛躍することが楽しみです。私自身も、研究に対する姿勢を見つめなおすきっかけとして、ときどき先端研の研究会などにお邪魔できたらと思います。